

		【修正日】平成30年 1月31日
【大分類】設計一般	【小分類】材料	【作成日】平成20年 4月 1日
<p>【Q-24】</p> <p>鉄筋規格変更時(SD345→SD390, SD490)の留意点としてどのようなものがあるか。</p>		

【キーワード】 定着長、降伏点

<p>【A-24】</p> <p>H24年版から、SD295に関する許容値の記載がなくなり、SD390及びSD490が新たに加わった。これは、SD295が「近年の使用実績が少ない」、「地震など一時的な大きな荷重の影響を受ける部材等の場合には降伏点の高い鉄筋が有利となる場合がある」(H24年版道路橋示方書Ⅲ3.3解説)ことによる。</p> <p>H29年版でも、SD345、SD390及びSD490が規定されているが、H24年版では、「鉄筋コンクリート構造の床版の鉄筋については、<math>140\text{N}/\text{mm}^2</math>の許容応力度に対し<math>20\text{N}/\text{mm}^2</math>程度の余裕を持たせるのが望ましい」(H24年版道路橋示方書Ⅲ3.3解説2)であったが、H29年版では、「鉄筋コンクリート部材の耐久性に配慮した場合の鉄筋の引張応力度の制限値は<math>120\text{N}/\text{mm}^2</math>(H29年版道路橋示方書Ⅲ6.3.2(2))となった。</p> <p>なお、降伏点の高い鉄筋を用いる場合の留意点は、以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・重ね継手長と定着長が長くなる。(道路橋示方書Ⅲ5.2.7(3))</li> <li>・鉄筋コンクリート部材の耐久性の制限値は大きくならない。(道路橋示方書Ⅲ6.3.2(2))</li> <li>・せん断補強筋の場合の降伏強度はSD345と変わらない。(道路橋示方書Ⅲ5.8.2(3))</li> <li>・曲げ半径をSD345よりも大きくする。(道路橋示方書Ⅲ5.2.6(3))</li> </ul>
--

【参考文献】

道路橋示方書・同解説Ⅲ:(公社)日本道路協会(平成29年11月)